

月刊
JMITU

労働情報

新型コロナ対応版



2月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガグループ分会 2022年発行

No.446

2022年 春闘・夏季一時金要求提出

物価も上昇、生活も厳しい
全ての人達に大幅賃上げを！

2月24日、私たちJMIT

Uセガグループ分会は、春闘・

夏季一時金要求を、セガ、SL

Sの2社に提出しました。

要求項目は以下の通りです。

・基準内賃金を5万円引き上げること。査定しないこと。

・アルバイト・パートタイマーの時給を最低2000円以上にする事。

・アルバイト、パートタイマー、派遣・請負社員を本人の希望があれば正社員にすること。

・アルバイト、パートタイマー

に退職金制度を設けること。

・1日実働7時間、週5日制、35時間労働とすること。

・新人事制度を廃止し、導入前の賃金体系に戻すこと。

・昇格の基準を明確にし、社員が納得できる昇格制度にすること。

・人事制度において評価給がテールの上限に達した場合昇格試験の機会を与えること。

・高齢者再雇用における有期契約社員の給与を、定年時の月

額基準内賃金の80%で算定し支給すること。希望するものには70歳まで再雇用すること。

・リロポイントを年間5万円にすること。アルバイト、パートタイマーにもポイントを付与すること。

・事業所の移転・統廃合、会社分割・合併・営業譲渡など企業組織の変更、子会社の設立、海外への生産移転、工場・営業所の進出、新業種の進出・業種転換、資本の移動、企業間提携、廃業、企業倒産にかかわる私的・法的手続きの申立・実行、その他、重要な経営施策の変更については、労働組合と事前に協議し、同意を得たうえで実行すること。

・退職金を、勤続1年につき基準内賃金の2ヶ月分とすること。

・家族手当を妻3万円、子2万円とすること。

・業務外傷病有給休暇を、一般従業員にも現行10日から最高60日(休日除く)を与えること。診断書代の実費を会社負担とすること。

・社会保険料の負担割合を労使3対7にすること。

・本人が結婚するときの結婚休暇は、連続2週間(休日含む)とし、子供が結婚するときは3日(休日を含まず)とすること。

成果主義ではなく 全ての方へ賃金底上げを！

- ・アルバイト、パートタイマーに社員同様、慶弔休暇を付与すること。

- ・弁当代補助を一カ月一万円支給すること。

- ・家賃補助5万円を支給すること。

- ・コロナが終息するまで毎月1万円コロナ手当を支給すること。

- ・2022年夏季一時金として、賞与資格別基準額を2万円底上げし、係数4・0を支給すること。ただし査定を行わないこと。及びパートタイム、アルバイト従業員にも、夏季一時金を支給すること。

日本は、世界にもまれにみる低賃金が20年以上も労働者に押し付けられ、一方で大企業や富裕層が大儲けをする異常な国となっています。

コロナ禍でも大企業(資本金10億円以上)は、日銀の金融緩和策を背景に利益を238兆円から241兆円へと3兆円も増やしています。

内部留保は2020年度末で459兆円にも膨れ上がっています。

「トリクルダウン。大企業が儲かれば、労働者の賃金は引きあがる」と安倍・菅政権は9年に渡って、大企業とともにアベノミクスを進めてきましたが、賃金も日本経済も悪くなる一方で、その誤りが明確になったと

言えます。

格差と貧困が広げられ一生懸命に働いてもまともに食べていくことすらできない労働者が増え続けています。

財界・大企業と政府による春闘破壊攻撃によって、労働者に分断と自己責任化が図られ、物が言えない状態に置かれて来たことが原因です。

物価の高騰が国民の生活を直撃し始めています。

電気・ガスやガソリン、灯油など生活に直結したエネルギー価格の値上げが顕著です。

賃金抑制がつづくもとの値上げは、個人消費をさらに冷え込ませ不況の引き金をひきかねない状況であり、賃金引き上げが急務です。

新人事制度が導入されている今の制度では、すべての労働者に賃上げがされない。

年々この制度のおかげで賃上げ率は下がっていつまでも上がることができません。毎年上がることができないのは、上限に達する前に、昇格をしていく人だけ、大半は、上限になり賃金は上がらなくなります。

岸田総理大臣は業績が回復している企業に3%を超える賃金引き上げの期待を示し、経団連会長も人が、最も重要な経営資源だと位置づけ、賃金の引き上げ、人への投資をと発言しています。

セガは、業績もよく賃上げできない理由はありません。

成果主義ではなく、すべての労働者に大幅賃上げを要求します。

仙洞田一彦

夕方になった。まだ明るい。二月も下旬になると陽が伸びた感じがする。もうすぐ春だ。歳をとると暖かい春が待ち遠しくなる。若い時もそうだったかもしれないが忘れた。去年の冬さえも、どういう思いだったか忘れてしまった。もしかすると去年も同じ思いで春を待っていたかも知れない。私は、部屋着の前のファスナーを顎の下まで上げた。上から外出時にいつも着るダウンを羽織った。近くのスーパーに夕飯を買いに出た。一人暮らしになってもうだいぶ経つが、夕飯はスーパーの弁当に決めていた。後始末が楽で

いい。代金を支払う機械のところにある箸を一膳抜いてくると、箸を洗う手間が省けた。スーパーの弁当という選択は限られる。二、三種の弁当をとつかえ、ひつかえとなる。贅沢なことはいってられない。弁当に「新発売」というラベルが貼つてあるのが、時々並んでいる。値段が折り合えば、たまには違うものをと、それに手が伸びた。スーパーの入口に重ねてある籠を一つ取り、店内に入る。弁当と惣菜の並んでいる棚に行く。晩酌は一合だから、つまみは、大体は弁当に詰められていた惣菜で間に合う。

卵焼きと飯の上に焼鳥が三本載っている弁当が目についた。卵焼きは卵三個分くらいの大きさだ。焼鳥もつまみにはもってこいのもの。たれの色と卵焼きの黄色が食欲をそそる。値段を見た。買えない値段ではないが、何かひと仕事終えたときとか、ちよつといいことがあった時でもない手が出ない。年金生活では、それもやむを得ない。偉い人から言われなくても、身の丈にあった生活をしなければならぬ。年金が徐々に減らされ、年金だけで生活できる人は幸せかもしれないと、ふと思った。

手に取った弁当を元に戻した。それで、それより二百円安い弁当を籠に入れレジに並んだ。最近レジ袋をくれないので、家から持って行く。支払いは機械相手だ。機械は親切じゃないので、機械の前でもたまたましている年寄りをよく見かける。私はポケットから持って行ったレジ袋を取り出し、買った弁当を入れるとスーパーを出た。出たところで、子供の自転車と危うくぶつかりそうになった。慌てて走り去った子供の背中には塾の名前の入ったカバンがあった。遅刻しそうなので急いでいたんだろう。塾には思い出がある。もう六十年くらい前のことだが忘れようにも、忘れられない出来事だった。私は英語がとくに駄目だった。テストはいつも三十点前後だった。いや、三十点以下だったかも知れない。父は紳士服の仕立て職人で、貧乏だった。だから私は高校

に行かないで、仕立職人になるつもりだった。中学生だった私は、無理して高校に行かなくてもいいと思っていた。父は高校に行けと言う。注文服の時代は終わった。もう既製の時代だ。高校に行つて勤め人にならなければだめだと言った。職人は病んだら保障がない、サラリーマンにならないければだめだと、自分の入院生活の体験から言っていた。私は家計を考えて高校には行かないと言っていた。私は反抗期だったかも知れない。それでときどき父と衝突していた。英語の勉強をしたくないからではなかった。本当に家計のことを考えて言っていた。生徒数が一番少ない年齢なので、高校進学で落とされ

ることは、まずない学年と言われている。英語ができなくても落とされる心配はない。家計がそれ程なのに英語の塾に行かせてくれたのだ。いま想像するに、親にとつて、ものすごく大変なことだったのではないか。それは父にとつて、私を高校に行かせるための伏線だったのかもしれない。しかし中学生だから、職人になるという自分の主張と、塾に通う矛盾を感じなかったのだろう。職人になるつもりなら塾など行かなくていいはずだったが、そこは中学生だ。

塾の先生は、いつも和服だった。頭は禿げていて、髪の毛は頭の周りだけにあった。顔はラッキョウ型で、背も低かった。通訳をしていたそう

だ。畳の部屋に、二人掛けの坐机がいくつか並んでいた。なんかの教科書に載っていた寺子屋のような感じだった。あるとき先生が「——これはどういう意味だ」と聞いた。みんな持つて来ている辞典を引いて、先生の言った単語の日本語訳の言葉をそれぞれに言った。

私の言った意味だけが少し違っていた。みんなの言ったのと似ているが少し違っている。

先生は一人に聞いた。

「その辞典はいくらだ」

聞かれた生徒は、辞典の箱の裏を見て答えた。

「四百八十円」

「君のは」

先生は私に聞いた。値段がわからないので、そのままに

答えた。

「付録です、本の」

私の英和辞典は中学生向け雑誌の付録だった。その次の号は和英辞典が付録で、英和辞典は赤い表紙、和英辞典は黒色の表紙だった。

「じゃ、そっちの辞典の意味だな」

私の答えを聞いた先生が、前に聞いた生徒の方を向いて言った。

「こういう場合は、値段の高い方の辞典の意味だ」

先生がボソツと言った。

今はもうそれが何という単語だったのかは忘れてしまった。塾の先生が辞典の値段で訳の意味を決めた記憶しか残っていない。付録の辞典は、一般に使われているような薄

い紙ではなく、雑誌と同じような紙だった。辞典の厚さは一センチくらいあっただろう。紙の厚さが違えば、頁数も違う。

「高い」辞典には、一つの単語に、いくつもの訳語が載っている。私の付録の辞典は、頁数を減らすためだろう、代表的な訳と思われるものだけを載せていたのかも知れない。それが運悪く、「高い」辞典の訳語とは違っていた。「高い」辞典なら、いくつも並んでいる訳語の中に、私の付録の辞典と同じ訳語があったかも知れない。それは後で考えたことであって、当時の私にはそんな指摘をする力も知恵もなかった。

辞典といえば父が買ってくれた漢字辞典を今でも持って

いる。発行年や記憶から推測すると小学校六年頃だっただろうか。うれしくて宝物のように入っていた。小学館発行の『現代漢字辞典』で「定価金三百八十円」とある。

「世間では高いもの、金あるものの言葉が通る」と、塾の先生は英語だけでなく、社会の仕組みも教えてくれたんだなどと、大分後になって思うようになった。

その事件後も塾に通ったかどうか、全く記憶にない。塾で事前に教科書の訳を聞いて行くので、授業中少しゆとりを感じたくらいの記憶で、英語のテストの点がよくなったかどうかの記憶もない。高校には進学した。高校一年の夏休み全部アルバイトに行った。四十日間で八千円もらった。

その金で電気釜を買った。日給、値段は定かではないが、四十日間の日給と電気釜の値段が同じだったことは確かだ。二年三年は部活動に熱中し、家計のことなどどこかに忘れてしまったようだ。

弁当だって値段が高けりやうまい。安けりやまずい。でも我慢、我慢。

辞典の話と結びついたかどうか分らないが、なんとなく結びついたような気分で、弁当ひとつ入ったレジ袋をぶらぶらさせながら家に帰った。